

アウトリーチ

通信



第 16 号

2010 年 9 月 20 日発行
年 2 回発行

神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

です。ピアノ伴奏による独唱にヴァイオリンのオブリガートを加えて、三人のアンサンブルとしました。

続いて、今年が生誕二百年の「ピアノの詩人」ショパンの〈前奏曲第七番〉です。今回のコンサートでは唯一のソロ曲を緊張しつつも優雅に弾き上げました。

ソロの次はデュオ二組です。まず、フルート・デュオでショッッカー〈三つの踊り〉より第一・二楽章、続いて声楽のデュオでドリーブのオペラ〈ラクメ〉より〈花の二重唱〉を演奏。ここでソプラノとメゾ・ソプラノが各々の声域を披露すると、その違いに子どもたちも驚いていました。

さて、いよいよ子どもたちの参加コーナーで、リズム遊びに移ります。曲はアンダーソン作曲〈プリंक・プランク・ブルンク〉と〈シンコペーテッド・ク

子どものための

コンサート・シリーズ

七夕コンサート

七月三日（土）、本学講堂にて「子どものための七夕コンサート」星まどとどけ、みんなのハーモニー」（子どものためのコンサート・シリーズ第二十八回）を開催しました。（第一部十一時、第二部十五時開演、来場者数計六百二名）。



「音楽によるアウトリーチ」履修生十一名に加えて、賛助出演四名の計十五名が

出演。一人で演奏するより二人、二人よりも三人と、たくさんさんの仲間で演奏

することの楽しさ、アンサンブルのおもしろさとハーモニーの美しさを感じてもらいたいという想いから、さまざまな楽器によるアンサンブル中心のプログラム構成を考えました（声

楽：松井るみ、糺谷榮里子、谷真貴子、ピアノ：山下恵里奈、早川藍香、藤波

真理子、ヴァイオリン／ピアノ：小林聡子、遠藤麻子、パーカッション／ピ

アノ：丹波友里、恒岡朋代、クラリネット／ピアノ：矢嶋杏里沙、フルー

ト：曾田友子、石原奈緒美、砂川奈穂、舞台監督・楠瀬由記）。

今回は履修生の一人が、コンサート全体の進行を司る舞台監督という役割に就き、舞台裏のスタッフと出演者

とを結ぶ大事な役割に徹しました。また、七夕コンサートをこなうことが決定した翌週から、「編曲担当」「リズム遊び担当」「台本担当」と役割を決めて各人がしっかりと分担しました。

幕開けは二台ピアノの八手演奏によるムソルグスキー作曲〈展覧会の絵〉冒頭曲です。司会のお話し無しに演奏が始まったコンサートですが、迫力ある舞台に、会場の子どもたちも何が始まるんだろうと興味を持って聞いてくれました。実はこの曲の直後に一番大変な舞台転換があり、舞台裏のスタッフに緊張が走ります。限られた時間でコンサート・グラランド・ピアノを一台舞台袖に入れるのですが、リハールを重ねた甲斐あって無事終了。次はアルディーティ作曲〈口づけ〉



ロック。

お話しも

リズム遊

び担当に

バトンタ

ッチしま

す。出演者

二人も客

席に降り

て、子ども

たちがリ

ズムを叩

く練習を

リードし

ます。演奏

に乗せた



リズム遊びの本番は、みんな息がピッタリあって大成功。

そこに、どこからか星の音に見立てたウインド・チャイムの音が鳴り、下総皖一作曲「たなばたさま」を会場の皆さんと一緒に歌いました。すると、また星の音。「お星さまの歌も、歌ってほしい？ですって！」と司会者が星

の声を代弁する演出で、モーツァルト作曲「きらきら星変奏曲」に進みます。

次々に増える楽器と音色でアンサンブルを楽しんでもらおうと、グロッケンとピアノで始まり、そこにクラリネット、フルート、ヴァイオリンが順に加わるという形に編曲したものを演奏し、最後には会場の皆さんにも一緒に歌ってもらいました。

お星様も喜んで、ウインド・チャイムの音が一際華やかに鳴り響きます。そして、

モーツァルトつな
がりて春
畑セロリ
編曲「モ
ーツァル
トの玉手
箱」と題



したモーツァルト・メドレーを、四人のピアニストがくるくると入れ替わる形で演奏しました。最後の曲は、ヘタ・トム・セイ・グッバイです。



出演者総出で演奏し、

曲の最後にシンバルが鳴り響いた時には、私たちも感無量でした。

私たちの

学年にとつて初めてのアウトリーチ

活動の大舞台で、右も左も分からない

状況からのスタートでしたが、指導の

津上智実先生やアウトリーチ・センタ

ーのスタッフの方々に助けて頂き、当

初の狙いであった「アンサンブルとハ

ーモニ」で音楽の楽しさを感じても

らう「セタコンサート」を成功させるこ

とができました。コンサートを作るに

は、演奏だけでなく、ドレスの色合い、

舞台での立ち居振る舞い、舞台スタッ

フとの連携など、たくさん考えなくて

はいけないことがあり、準備をしてい

たつもりでも、合わせやリハーサルを

する度に、「これでもできる、あれもで

きる」とみんなからアイディアが溢れました。

終演後、講堂の出口でお客様をお見送りしたところ、お客様から直接、笑顔と「良かったです」の声を頂いたり、子どもたちからも「きれいな歌、ありがとう」と照れながら手を握ってもらったり、子どもたちのためのコンサートならではの素敵な体験をたくさんすることができました。

(楠瀬由記、松井るみ・記)



学内アウトリーチ

めじらウンジ・コンサート

七月十六日(金)の昼休み時に、めじらウンジにおいて「クラシック音楽への扉VOL.1」を開催しました(ピアノ・遠藤麻子、藤波真理子、早川藍香、小林聡子、前田彩華、矢嶋杏里沙、山下恵里奈、声楽・楠瀬由記、松井るみ、フルート・古山友貴、ヴァイオリン・井上佳那子、司会・松井るみ)。

これは、在校生や教職員を対象とする「学内アウトリーチ」の試みで、「音楽によるアウトリーチ」始まって以来、初の試みです。私たちは「学内で気軽にクラシック音楽を楽しんでもらう」ことをめざして企画しました。

今回のねらいは、音楽学部生の普段の活動を他学部生等知ってもらう、名曲を生演奏することでクラシック音楽の良さを伝える、筆記試験前の時期に当たるので、音楽を聴くことでリラックスしてもらう、の三つ。これらを達成するため、クラシックを日頃あまり聴いていない人でも楽しめるよ



うな選曲を心がけました。

まずはピアノ連弾から。シュエルト(軍隊行進曲第一番)、ブラームス(二十一のハンガリー舞曲集)より(第五番)

で幕開け。続いて、ショパンの《十二の練習曲作品一〇》より(第五番 黒鍵)《第十二番 革命》、《ノクターン第二番》をピアノで独奏しました。

次は、ヴァイオリン独奏でエルガーの《愛の挨拶》、ソプラノ独唱でアルディーティ(口づけ)とプッチーニのオペラ《ラ・ボエーム》より《私の名はミン》を演奏しました。

続いて、シュ



ーマンの歌曲《献呈をリス》がピアノ用に編曲した作品を演奏。最後に、広く親しまれている最近の日本歌謡から絢香(三日月)をフルート独奏で演奏して締め

くくりました。

めじらウンジはステージがなく、フラットな場所だったため、慣れない状況に出演者一同とても緊張しました。その一方で、お客様がとても近いので、「相手に伝わっているかどうか」「どのように感じてもらっているか」を肌で直に感じる事ができました。

ランチタイム・コンサートということで、来場の皆さんには昼食をとりながら友人同士で気軽に楽しんでもらえたように思います。

その中に、コンサートの告知活動をしていた時に声をかけた他学部の学生さんが、友人を誘って聴きに來てくれているのに気付きました。自分の足を使って、自分の言葉で伝えようと、相手に気持ちが伝わり、聞きに來てもらうことができるのだと実感できて、大変うれしく思いました。後日、卒業生の方から「自分の子どもが学校にも來てほしい」という話を頂くなど、このコンサートを企画しなければ起こることのなかった出会いもありました。反省点としては、チラシやポスターの準備に思ったより時間がかかったことです。本番の二カ月前には一度津

上先生にチェックしてもらえようしにしなければならぬと思いました。また、今回は七月四日の「子どもたちの七夕コンサート」から日にちが二週間しかないというスケジュールでしたが、やはり前日には通してリハールをすることが必要なので、各自それを踏まえて準備するべきだったと思います。

第一回ということもあり、どのような様子になるか想像がつかなかったのですが、今回気付いた点や反省点を活かして、第二回のコンサートにつなげていきたいと思っています。

(松井るみ・記)



学外アウトリーチ

(〇九年度の実習から)

雲雀丘学園小学校

三月十六日(火)、雲雀丘学園小学校(宝塚市雲雀丘四一―二)の音楽室で五年生四クラスを対象にアウトリーチ実習を行いました(音楽・谷真貴子、松井るみ、糺谷榮里子、フルート・木村友香、ピアノ・岡崎典子、須山由梨、司会・石津ひろの、藤野直、特別出演・雲雀丘学園小学校音楽教諭岡村圭一郎先生)。

「楽しいクラシック・コンサート」それぞれの曲が持つ魅力を感じよう」をテーマとして、子どもたちの知っている曲を中心に、各曲の特徴を説明しながら演奏を進めました。

人気漫画で馴染みのあるガーシュイン作曲《ラプソディー・イン・ブルー》(ピアノ連弾)から始まり、モーツァルト《トルコ行進曲》(ピアノ連弾と二重唱)、ショパン《アンダンテ・スピアナート》と華麗なる大ボロネーズ》(ピアノ独奏、シュベールの歌曲《魔王》を岡村圭一郎先生のバリトン独唱で演奏しました。

「リズムで遊ぼう」のコーナーでは、アンダーソン作曲《プリंक・プランク・プルンク》(ピアノ連弾)に合わせ、手や体を使ったリズム遊びを子どもたちと一緒にしました。

続いて、ビゼーのオペラ《カルメン》より《序曲》(ピアノ連弾)、《間奏曲》



(フルート独奏)《ハバネラ》(メソ・ソプラノ独唱)、《何を恐れることがありません》(ソプラノ独唱)、最後は岡村先生による《闘牛士の歌》(バリトン独唱)で締めくくりました。

朝から4コマ連続の授業で、体力的に持たずかどうか心配でしたが、演出などに工夫を凝らした甲斐あって、生徒たちはリズムを取ったり口ずさんだりしながら楽しく集中して聴いてくれました。生徒との距離も適切に取ることができ、音楽との良い出会いの場を作ることができたと思います。

一年間のアウトリーチの学びで最後の実習となりましたが、今までの集大成として充実したプログラムを実現できました。これからもアウトリーチ活動がんばっていききたいと思っています。(石津ひろの・記)



国立病院機構 刀根山病院

三月四日(木)、独立行政法人国立病院機構刀根山病院(豊中市刀根山五一―一)の院内コンサート(六十分)に出演しました(音楽・樋岡絵里那、井本綾華、フルート・木村友香、ピアノ・小幡文香、岡崎典子、辻本真美)。

今回は「春のコンサート」と銘打ち、桜の花びらを模したピンク色の切紙を準備して、コンサート会場の作業療法フロアを飾り付けました。患者の皆様に楽しんでもらえるコンサートと考えたプログラムは、ピアノとフルートによる「春の曲メドレー」(「春が来い」)《どこかで春が》、《春がきた》でスタート。瀧廉太郎《花》を二重唱で、中田章《早春賦》をソプラノ独唱で、平井廉三郎《さくら幻想曲》をピアノ独奏で、と季節の曲を続けます。

次は、クラシックの世界へ。リハビリ用の階段をオペラの舞台に見立てて、お父さんに結婚の許しを乞うブッチーニのオペラ・アリア《私のお父さん》を独唱し、続いてエルガー《愛の挨拶》をフルート独奏しました。

ここで、体操の時間です。腕のストレッチや深呼吸などで会場の皆様

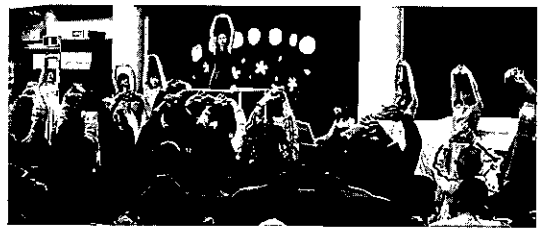
体をほぐして頂きました。続いて、日本の名曲を皆で楽しむコーナー。リズム遊びをしながらの《みかんの花咲く丘》、そして《故郷》(荒

城の月》《リンゴの歌》《青い山脈》と一緒に歌いました。会場の皆様も大きな声を出して歌って下さいました。

ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」から《私のお気に入り》《ドレミのうた》《エーデルワイス》を歌とフルートの

アンサンブルで演奏し、最後に《上を向いて歩こう》と《川の流れるように》を歌ったところ、自然と会場の皆様が唱和して下さって、大変うれしかったです。

コンサートの準備に当たっては、プログラムを何度も作り直すなど色々苦労がありました。多くの方に喜んで頂けて、終わった時の達成感は大きく満たされました。患者の皆様の素敵な笑顔を見ることができて、色々とうれしい声も頂いて、とてもよかったです。病院スタッフの皆様からも勉強になるお話を頂戴して、心より感謝しております。



(木村友香・記)

「アンサンブル たまてはい」

アウトリーチ七期生 大澤 侑子

たばたと過ごしていると、ふとピアノ演奏から離れてしまっていることに気がきます。そんな状況を緩和するため、今年一月、川西音楽家協会主催の

市民向けサロン・コンサートに出演しました。また、少々無理をしても門下の発表会に参加することで、日頃の練習の積み重ねの必要性を痛感し、生活を見直すこととなっています。大学を卒業すると試験に迫られることもなく、演奏に関して自由だからこそ、自分自身で何か目標を見つけていくことが肝要です。

また、演奏を生かして様々な人と関わりを持てるアウトリーチ活動には、学生の頃から魅力を感じていたのも、アウトリーチ・センターからの依頼演奏を幾つか引き受けてきました。活動していく中で「気軽に演奏依頼ができて

チャペルコンサートVol.12 ～デュオの魅力～

アンサンブルグループ/たまたまこ
 1997年デビュー。デビューアルバム『たまたまこ』は、
 1998年リリース。デビューアルバム『たまたまこ』は、
 1998年リリース。

会場：宝塚栄光教会

751- 2000 25-00%

なかつたため、私達の頃、私達のレパートリーである、モーツァルト『フィガロの結婚』より「手紙の二重唱」、ジ

現状です。また、広報に関しても模索中です。

在学中のアウトリーチ実習から学んだように、場数を多く踏むことで、お話しの際の取り方を掴んだり、レパトリーを増やせたりと成長に繋がることは周知のことです。しかし、実際にはコンサートの依頼がそう度々ある訳でもありません。そこで、メンバーの有志でディサービスセンター

る団体があつたらいいのに……」というお客様の声の機に、「アンサンブルたまてばこ」というグループを結成しました。このグループは、いつもメンバー全員で演奏活動を行うわけではなく、都合の合う者同士で出演するといったスタンスで展開していくのが特徴で、従来の先行グループには見られなかったものだと思います。「たまてばこ」という名称は、何が出てくるかは開けてからのお楽しみ！という由来で命名しました。

この春の結成後すぐに、運の良いことに、私が聖歌隊の伴奏をしている宝塚栄光教会で一時間のチャペル・コンサートを行う機会に恵まれました。

ヤズバージョン（春畑セロリ 編）によるモーツァルト「交響曲第四十番」、ドツプラー「アンダンテとロンド」など、バラエティに富んだプログラムで臨みました。


当日は百名
余りの来場者
があり、聞き
応えのある珍
しい組み合わせ
のコンサー
トと喜んで頂
くことができました。

実際にグル
ープでの活動



や老人ホームを訪れ、ボランティアでミニ・コンサートを催すことで場数を増やしています。

その度にお客様から温かい言葉を頂いて、こんなにも音楽を必要とする方々がおられるのだと実感しています。



人々に喜んでもらえる音楽会とは、どのようなものでしょうか。それは、私達の音楽が聴衆の一人ひとりの心に届き、聴衆と演奏者が一体感を持つて共に楽しむことのできる音楽会。私達各々とはもとより、心構え（サービスピリット）を始め、表情や話し方などを含めてスキルアップを怠らずに個性を磨き、更にそれらが重なり合うことで様々な魅力が醸し出せるようになることが必要だと考えています。そしてそんな心構えを自覚したメンバーの一人となって音楽会を催していきたいと思っています。

「アンサンブル たまてばこ」
(<http://www.justmystage.com/>)

home/tamatebako/)



アウトリーチ活動の

教育的効果の解明をめざして

アウトリーチ七期生 井上 智恵子

在学中および卒業後のアウトリーチ活動を通して、私の中の毎回の課題はアウトリーチ活動によってもたらされる「教育的効果」でした。単に演奏するだけやお話付きのコンサートだけで終わるのではなく、アウトリーチによって教育的効果をもたらしたい、けれども「音楽の教育的効果ってどうあり得るのだろう」という思いがありました。そこで私は大学卒業後、中学校と高校で非常勤講師をしながら、兵庫教育大学大学院学校教育研究科（修士課程）で研究をしています。よく現代の子どもたちの感受性が低いといった話を聞きます。しかし、非常勤講師として接してみると、子どもたちはそれぞれ色んなことを感じているのに、その自分の思いを表現する術を知らないだけなのではないかと感じます。特に鑑賞授業での生徒の感想には「すごいと思った」「分かってよかった」といった表現に留まるものが目立ちます。「何が」「すごいのか」「何について」分かったのか、自分の考えを具体的に書くことができない

子どもが多いのではないのでしょうか。

そこで、何度か授業に楽器体験を取り入れてみたり、楽器がなくてもできる即興演奏を取り入れてみたりしました。楽器は実際に弾いてみないと、どんな音がするのか分かりません。弾いてみて初めて理解することができません。その「発見」をした時の子どもたちの顔は、聴くだけの受動的な授業では得ることが出来ない感動があると改めて気づかせてくれました。決して子どもたちの感受性が低い訳ではなく、生の体験は何ものにも換え難いものだと感じました。

大学院でも、兵庫教育大学附属小・中学校の子どもたちと大学オーケストラとの共演を提案して実現することができました。子どもが普段一人で弾いている楽器が、オーケストラと重なるだけでぐっと厚みが変わってくる、そんな体験を子どもたちは味わってくれたと思います。

卒業後のアウトリーチ活動としては、アウトリーチ七期生を中心に、病院や幼稚園、クリスマス会、ピアノ発表会の余興といった場で演奏を続けています。仕事をする傍らでのアウトリーチ活動は、スケジュールが合わなかったり、合わせの練習時間が充分に

確保できなかったり、なかなか大変だと痛感しています。また、聴衆が幼児から大人までと多岐に渡る中、毎回メンバーが変わってしまうことで安定した演奏を届けられるのだろうかと不安も感じています。たとえ聴衆がクラシック音楽初心者だったとしても「いい音楽」を感じる心は誰もが持っていると思うからです。



依頼者側からも「安定した演奏をしてほしい」「毎回演奏者が変わることでこちらの要望を一から説明するのは大変」といった要望がありました。病院や学校等の現場は目まぐるしい日々で、演奏会に費やす手間を軽減したいのが実情でしょう。しかしその手間は、効果的なアウトリーチ活動をするためには最も重要なプロセスで

す。とすれば、演奏家側と依頼者側のつなぎ手となる存在がいれば、両方の負担は軽減するのではないのでしょうか。そのつなぎ手の役割としては、社会に対する啓発、演奏者側と依頼者側との調整、地域のセンタ―的機能を果たすこと等が挙げられます。

今後の展望としては、私自身、演奏者として社会に対する音楽の発信者であり続けると共に、演奏家と依頼者をつなぐコーディネータになりたいと考えています。

最後に、卒業後ますます気の合う仲間や同じ目的意識を持った仲間を見つけたことが大切だと感じています。そのような仲間の存在がないと、なかなかアウトリーチ活動を続けていくことは難しいでしょう。一人だけでは何も創り上げることはできません。そのためにも、一つ一つの出会いを大切にしていきたいと思う毎日です。



インタビュー

三大学連携による

「子どものための

スペシャル・コンサート」

「三大学饗宴」子どものためのスペシャル・コンサートは音楽で広がるイメージの世界」（子どものためのコンサート・シリーズ第二十九回）が十月十六日（土）、本学講堂で開催されます。これは神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学、東京音楽大学の学生が力を合わせて作り上げる文字通りスペシャルなコンサートです。そこで、この連携事業を支える本学音楽学部連携ルーム主席スタッフの木村明さんにお話を聞きました。

問い）コンサートの聴きどころは？

木村）まず、三つの音楽系大学が協同してコンサートを作るなどということとは、従来考えられなかったこととおそらく日本で初めての試みではないでしょうか？しかも各大学の強みを持ち寄った内容で、歌とピアノ、フルート・アンサンブル、そして小オーケストラと多彩です。各大学のテーマはそれぞれ異なりますが、全体は一つの大きなテーマで結ばれています。この正に有機的な協同が何よりの聴きどころです。

問い）テーマは「音楽で広がるイメージの世界」ですが、ねらいは？

木村）音楽にはイメージを喚起する強い力があります。その広大な世界を子どもたちに感じてほしいとの願いから、このテーマが提起されました。具

体的には、昭和音楽大学は声楽とピアノによる「光と水のイメージ」、神戸女学院大学はフルート・アンサンブルによる「アラベスクの音楽」、東京音楽大学は小オーケストラによる「動物の音楽」を展開します。

「光と水」は天地で流動するもので、「動物」は陸海空で生きるものであり、いずれも自然界に存在するものです。が、それに対して「アラベスク」は幾何学的で抽象的な世界です。西洋ならアラベスク、日本であれば唐草模様を考えてみれば分かるように、何かを表しているのではないのに、それ自体として美しい存在です。音楽にもそのような美、すなわち音の構築そのものの美があるということを知りたいという熱い思いから、本学は敢えてこの難しい課題に取り組むことになりました。この春赴任されたフルートの榎田雅祥教授の協力を得て、すでにアンサンブルの練習が始まっています。さらに舞踊専攻の学生も加わって立体的な舞台にしようという方向で動き出しています。

問い）三大学共演という初めての企画が実現した経緯は？

木村）二〇〇八年秋に行なわれた三大学フォーラムが発点と聞いています。神戸女学院大学の「音楽によるアウトリーチ」に続いて、東京音楽大学の「アクト・プロジェクト」、昭和音楽大学の「アーツ・イン・コミュニティ」がスタートし、いずれも地域密着型の音楽教育プログラムであるところから、共通の課題を議論する場としてフォーラムが持たれたそうです。その時の会場校であった東京音楽大学の学生が、今度は自分たちが神戸に行きたいと言った言葉が先生方の心に残っていたとのこと。昨年、文部科学

省の平成二十一年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に音楽系三大学による共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション」音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」（以下、三大学連携と略記）が選定されたことで、こうした大掛かりな企画が可能になりました。

学生たちも一所懸命に準備をしていますので、ぜひ多くの方々に足を運んで聴いてもらえればと思います。

連携ルームQ&A

Q、連携ルームとは？

A、前述の三大学連携が文部科学省のプログラムに選ばれ、二年半の助成を受けることになりました。それを機に音楽学部内に設立されたのが連携ルームです。場所は音楽館の二十九室で、月曜から金曜、八時五十分から十六時五十分まで二人体制で勤務しています。

Q、主な業務は？

A、代表校の東京音楽大学に置かれた連携センターや昭和音楽大学の連携ルームと協同して、連携事業を推進していくことです。連携事業の柱である三大学共通の新規科目「ミュージック・コミュニケーション講座」を円滑に実施するため、インターネット・ビデオ会議システムの操作を担当し、科目担当者の津上智実先生をサポートします。また、学生のケアも大切な業務の一つです。

Q、大変なこと、楽しいことは？

A、三大学間で調整は思っていた以上に大変で、会議も多く時間がかかりました。しかし、他流試合から学ぶことも多く、学生と接することも大変楽しいです。力になってあげたいと常に思っています。

木村明
やることなすこと新しいことばかりですが、楽しみながらこなしています。

谷田奈央

アウトリーチ・センターから連携ルームへ。学生さんの身近な存在でありたいです。

藤原聡子

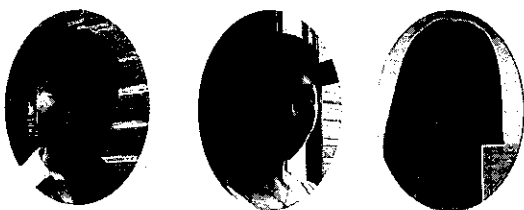
まだまだ不慣れですが、学生の方々と一緒に頑張ります。

神戸女学院大学音楽学部連携ルームHP
<http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/renkei/>
Tel: 0798-51-8588

第三十回子どものためのクリスマス・コンサート

今年度の「子どものためのクリスマス・コンサート」は十二月十一日（土）、本学講堂にて開催されます。

今年度からオーディションを行い、山本佳苗さん、井上香菜さん、杉原真弓さん、松本真奈さん、奥田敏子さん、河田菜摘子さん、大石圭奈子さんの七名の出演が決定しました。ピアノ、パイプオルガン、フルート、ホルン、トーン・チャイムの演奏をお届けします。どうぞお楽しみに！！



今後の予定

「三大学饗宴！子どものためのスペシャル・コンサート ～音楽で広がるイメージの世界～」

日時：10月16日（土） 15：00～（小学生以上対象、小学生未満入場不可）

会場：神戸女学院講堂

出演：神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学、東京音楽大学の学生

入場料：大人 500 円、子ども（小学生～19 歳）300 円

お申込み方法：連携ルームのホームページをご覧ください

神戸女学院大学音楽学部連携ルーム HP <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/renkei/>



「子どものためのクリスマス・コンサート ～愛と名曲に包まれたすてきなコンサート～」

日時：2010 年 12 月 11 日（土）

第 1 部 11：00～（年齢制限なし、小学生未満対象）

第 2 部 16：00～（小学生以上対象、小学生未満入場不可）

会場：神戸女学院講堂

出演：井上香菜（ピアノ）、河田菜摘子（フルート）、松本真奈（声楽）、奥田敏子（声楽）

大石圭奈子（ホルン）、杉原真弓（ピアノ、オルガン）、山本佳苗（ピアノ）

入場料：大人 500 円、子ども（19 歳以下）300 円

お申込み方法：アウトリーチ・センターのホームページをご覧ください



音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
子どものための楽しい体験学習を！

♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター（月～金 10：00～15：00）

〒662-8505 西宮市岡田山 4-1 TEL: 0798-51-8584 FAX: 0798-51-8551

E-mail: outreach@mail.kobe-c.ac.jp <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

七夕コンサートが終わり、これから学外実習へ♪頑張ります！（寺澤）

秋のスペシャルコンサート、三大学の学生さんたちの演奏をお楽しみに！（三上）

七夕コンサートは終わりましたが、一人てんてこ舞いはしばらく続きそうです（井上）

学内アウトリーチの試みが実現しました。学生のパワーに脱帽です。（津上）